

## 令和5年度 第1回社会教育委員会議 会議録（要旨）

1 日 時：令和5年7月13日（木）10:00～11:30

2 場 所：北九州市立生涯学習総合センター 3階ホール

3 出席者 委員 野依議長 他 11名  
事務局 市民文化スポーツ局長 他27名

### 4 議題、議事の概要

(1) 市民文化スポーツ局長あいさつ

(2) 議題

ア 令和5年度生涯学習推進計画の主要事業について（取組予定）

イ 令和5年度の社会教育関係団体補助金について

ウ 協議テーマ「“学びと活動の環”からつながる地域づくり・人づくりについて」  
についての取りまとめ（案）に関する意見交換

### 5 主な質疑応答、意見等

議題（ア）令和5年度生涯学習推進計画の主要事業について（取組予定）

（事務局：事業について説明）

委員：（資料1の）7ページの一番下、「折尾まちづくり記念館の整備・充実」について。

（折尾まちづくり記念館は）去年5月に開館し、図書館の分館もあるため訪れたが、他にもフリースペースや折尾の昔からの成り立ち（を紹介した）パネル、イベントスペースがあった。近くの方、折尾駅を利用される方、そしておそらく東筑高の生徒の皆さんが勉強したりしており、とてもにぎわっていた。大変立ち寄りやすいスペースになっていると感じた。

折尾まちづくり記念館の取組みで良かったことや指定管理受託事業者が工夫していることなどと、ほかの地区にどのように横展開していくかを伺いたい。開設してまだ1年なので、今後の課題かと思うが、横展開していくとほかの地区にとってもいいことではないかと感じたということが1点目。

2点目が、（資料1の）8ページのNo.35、「子育てネットワークの充実」について。

今、子育てをサポートしていく取組みは、官民いろいろあるかと思う。特にコロナの期間中、従来対面でできていたことがなかなかできず、初めての子を持つお父さん・お母さん、特にお母さんが非常に悩んでいるということをよく報道でも耳にする。私が今勤めている会社に、ちょうど産休から復帰した女性社員がいるが、やはり「コロナ期間中は大変だった」、「地元ではない所に今住んでいるため、周りのサポートを得づらい」という声を聞いた。

そうしたところ、これ（「子育てネットワークの充実」）を目にして、サポーターの育成は非常に重要だと思ったが、この「頼るところがありますよ」という情報はどのように（発信）しているのか、参考に伺いたい。

3点目が、（資料1の）12ページの56番目のギラヴェンツの関係（事業）。

去年ワールドカップがあり、サッカー選手が取り上げられて報道もされたと思う。北九州市の場合は、サッカーチームの本拠地というつながりは、体力づくりやスポーツに親しむとてもよいきっかけだと感じている。今はスポーツチーム全体で、行政やまちづくりと緊密に連絡をとって、本当に地域に根差すスポーツチームになろうという活動が大変多いと思っている。

川崎市の川崎フロンターレは、スポーツの推進に限らず、こども・子育て支援、健康づくり、地域の魅力発信、地域コミュニティの活性化、地域課題の解決など、まちづくりに関する全体についての協定を川崎市と締結している。

（川崎市の図書館で）川崎フロンターレの選手が、インタビューを受けながらお薦めの本を紹介する中で、去年非常に話題になった田中碧選手も紹介していた。スポーツが苦手なお子さんでも別の好きな部分にスポットが当たれば、身近になる。

（スポーツに）参加するだけではない、この選手を応援したいと思うようなつながりを学校の教材などで育てている。

（北九州市）市民文化スポーツ局という名前が出てくるので、今後、そこまで広げて考えるのもいいと思う。サッカーも、本来の試合だけではない応援を市民側からできるようになるのではないかと思い、その辺の提案も（質問に）含めたい。

事務局： 折尾まちづくり記念館について。

昨年5月に開館し、市民センターと同様に、例えば子育てのボランティア講座などもしているが、折尾まちづくり記念館の特色として、折尾地域の情報を収集し、それを広く伝え、地域住民の皆さんに折尾の良さを知っていただくということを事業の目的の一つにしている。

運営主体もその目的に一生懸命取り組んでいるが、専門家をどう確保するかや資料などをどう伝えていくかを試行錯誤しているところである。市民センターなどでは、地域の伝承や歴史をお知らせしているところもある。記念館でのいい取り組みやノウハウなどが確保できれば、ぜひそれを市民センターにも提案したいと考えているが、今は試行錯誤の段階である。

事務局： 子育てネットワークの充実について。

委員の質問のとおり、子育てに関して悩みを抱えている方が多いというのが現状である。コロナ禍で、なかなか親同士の交流が図れなかったという側面があると考えている。

子育てサポーターは、市内全域に1,500人程度いる。各市民センターに所属して、市民センターの活動の中で、子育てに関するサポートを行っている。研修等を充実させていくとともに、この（サポーターの）周知については「市民センターだより」等で周知を図っているところである。

また、子育てについては、共働き世帯の増加などにより、なかなか時間の確保が難しいという課題もある。その課題に対応するために、（資料1の）12ページの

No. 58「親力アップ情報発信」で、新しい取組みとして、ITを活用した情報発信を図っているところである。

事務局： ここ（資料1）に「ホームタウン推進事業」とあるが、北九州市内をホームタウン、あるいは準ホームタウンとするプロスポーツチーム等が、今、ギラヴァンツをはじめ7チームあり、それぞれのチームが、市民に身近なチーム、愛されるチームになることを、一番の命題として活動しているところである。

分かりやすいところでいうと、市内にホームタウンを持っているギラヴァンツ、フットサルのボルクバレット、プロ野球の独立リーグの北九州下関フェニックス、それから、ソフトボールのタカギ北九州ウォーターウェーブ、この4チームは北九州市と連携して「プロスポーツチーム等連絡会議」をつくり、例えば小倉駅で合同のPR活動、ちらし配りをするなど、とにかく知ってもらって愛されるチームになるような活動を続けている。

さらには、ギラヴァンツ北九州に関しては、今後、選手が何人かずつ各区の応援大使となって、区の様々なイベントなどにPRに出向くといった取組みもこれから進めていく。各チーム、それぞれ工夫してそのような活動をしている。

（委員から）このようなご提案があったということをお伝える。

委員： （資料1の）3ページの10番に「デジタル活用講座」があるが、令和4年度予算が令和3年度予算140万円の6倍弱になっている。さらに、今年度（令和5年度）は文科省の取組みも加わって、さらに（令和4年度の）8倍弱の予算が付いている。

この予算を取っていただいたのは非常にありがたいことだが、これは具体的にどういうところに大きな予算を付けようとしているのかを伺う。

事務局： 「デジタル活用講座」については、令和3年度から取組みを開始している。今まで各市民センターを会場にしており、令和3年度は30館、令和4年度も同じく30館程度を対象に、（実施館を）募集しながら実施してきている。

令和4年度は、これ（講座）に加えて相談会を拡大し、大型の商業施設、例えば下曾根のモールや戸畑のイオン、あるいは市民センターなど9カ所で実施した。

活用講座については、令和3年度の参加者がおよそ250名程度、令和4年度は312名である。昨年度実施した相談会は、36名相談に来られた。

このデジタルデバイドの解消に向けての取組みは、デジタル市役所推進室だけではなく、生涯学習課や地域振興課など、様々な部署と連携して推進している。今年度（令和5年度）については、生涯学習課が国の事業の申請をし、（デジタル活用講座を市民センター）全館に拡充する役割分担になっている。

事務局： 今年度の「デジタル活用講座」について補足説明する。

令和5年度については、国の補助金を活用して事業を拡大して行いたいと考えている。生涯学習の分野においても、DXの推進が大きな課題となっており、文科省でも新たな補助金を創設したところである。令和5年度に、全ての市民センターで（「デジタル活用講座」を）開催したいと考えており、その経費がかなり大きく、4,000人分くらいの規模を確保できる見込みである。

やはり高齢者の方を中心に、スマホの習得を進めていただきたいと考え、国の事業を活用しているところである。各市民センターで準備を進め、順次開催したい。

委員：（資料1の）6ページの4のNo.24「学びから活動への仕組みづくり」について。いろいろなところで学習した人たちについて、次（活動）につなげていこうという事業で、これはとても大事な事業だと思っている。  
令和5年度の取組み予定に、アンケートを実施して「近隣大学等に拡大することによって」、「ボランティア希望者の掘り起こしを検討する」とあるが、具体的な案はあるか。

事務局：「学びと活動のマッチング」という形で取り組んでいる。行政や大学などで行われた講座の中でアンケートを採り、その中で、具体的に地域活動をしたいと回答した方にこちらからアプローチして、活動の場を紹介するという事業である。  
令和4年度は、アンケートでの地域活動希望者が506人、地域活動を含めたボランティア活動等につながった件数が123件ほどあった。取組みとしては、これが広がっていき、学びから地域活動へとつながる「環」が大きくなるよう期待している。

委員：学んだことが次に活かされ、大変いいことである。  
次に、北九州市には「まなびネットひまわり」というとてもいいシステムがあるが、ホームページがリニューアルされて、とても見やすくなり、好評だと思う。そこに、講師として進んで登録する方もいるし、（自分の）ホームページを持っていない方がこういったもの（「まなびネットひまわり」）にアプローチすることで、講師登録する方や少し地域で協力してみようかという方が増えてくると思うので、とてもいいことだと思う。

それで、1つ。様々な部署でボランティア（育成）や人材育成の事業をしている。そして、次にアプローチをし、（活動の）場も紹介した。そこで具体的に、例えば（その方が）市民センターに行ったときに、誰が対応するのか（ということ）。

生涯学習総合センターには、地域・人づくりアドバイザーがいて、入口を指し示してくれる。市民センターには生涯学習推進コーディネーターがいるが、今は名前だけで、あまり活動をしていない。もちろん研修もあろうし、市の大事な事業であるが、コーディネーターとしての立場は、館長でも（市民センター）職員でもない。では、（市民センターに）行ったときに、誰が対応するのか。館長は少し対応する場合もあるが、（市民センター）職員はほとんど対応しない。

そのようなとき、（生涯学習コーディネーターが）人づくりのアドバイザーになるような研修、例えば地域・人づくりアドバイザーの少し小規模的なことをすることで、（講師希望者や地域活動希望者が）市民センターに行ったときに、力強いアドバイスができるような研修をしなければならない。

生涯学習推進コーディネーターの育成も大事なことなので、（学びから活動への）マッチングをする方向に進めると、ボランティアをやりたい、学びたい、けどどうしていいかわからない、自分でできるだろうかという人が、そこ（市民センター）に行ったときにどう（アドバイス）するかという面をもう少し強化すると、より市民が活動しやすいものになると思う。

事務局：生涯学習推進コーディネーターは、現在、市内に約50名おり、各市民センターに配属している。委員の言うとおりに、コーディネーターの活動範囲などについて、いろいろ意見を頂いている。研修も現在実施しているが、その研修の中に、先ほど提案されたような内容を盛り込んで、さらに充実させていきたい。

#### 議題（イ）令和4年度の社会教育関係団体補助金について

（事務局：補助金について説明）

委員：この社会教育関係団体補助金をもらえる・もらえないとする基準は何か。類似の団体はもっとたくさんあると思うが、どういう団体がもらえて、どういう団体がもらえないのかというのを教えてほしい。

それから、毎年これ（補助金額）を見直すのか、それとも3年スパンとか5年スパンとかで見直すのか。

事務局：例年、この社会教育関係団体補助金については、予算の範囲内で支出しており、その年々の状況に応じて支出している。

この社会教育団体への補助金については、社会教育委員会議で意見を聞くということになっており、議題に上げている。

補助金額は、予算の範囲内となっているので、毎年予算の要求をしている。定期的に見直していくというわけではないが、逐次見直しを行っている。

委員：基準が非常に分かりづらいので、あとでいいので補助金の要綱がほしい。

#### 議題（ウ）協議テーマ「“学びと活動の環”からつながる地域づくり・人づくりについて」についての取りまとめ（案）に関する意見交換

（事務局：取りまとめ（案）について説明）

委員：全般としては非常にうまくまとめられていると感じる。この2年間の取組みの総括という側面を取り入れるということもあるだろう。

（しかし）ここだけ見ていると、2年前も2年後も同じような文章を書けてしまうのかなという部分がある。この2年間で特徴的だったことは、やはり、コロナ禍の後半戦（の時期）だったということだと思う。つながりたいけれどつながれないという時期に、改めてそのベースとしての「地域づくり・人づくり」をやりつつ、市民センターが中心となって苦勞しながら、例えば図書館が閉館している時もひまわり文庫で貸し出す活動をされていたとか、その辺の市民センターとしての役割もあったと思う。

先ほどの新しい今期の活動の中で、ITに関する取組みを増やそうという話があったが、（取りまとめ（案）38ページ「5. 総括」の）下から3行目の「コロナ禍を契機として、」とあるとおりに、コロナ禍だからこそ、これまでなかなか進んで

こなかったデジタルの問題が、(人をつなげる) 手段として非常に有効だとわかったのが、この2年間、3年間だったと思う。

この2年間でそういったところ(デジタル化の有効性)を改めて問われたというか、(デジタル化に)シフトしていく必要が出てきたということで、予算としても(国に)申請して確保できたというのは、この「総括」を活かした次のネットにつながる取組みになっている。

この今期の特徴を、全般のことを書きつつ、もう少し紙幅を割いてほしいと思いつながりながら読んだ。

委員： 総括部分は、率直に言って非常に素晴らしい文章、総括になっていると私も思っている。事前に読んだ時も、単純にいうと関心を持った。

先ほどの委員の意見にもあったが、最初に「今期の協議にあたっては」と書いているとおり、まさに今期の総括をするとこういうことだった。

特に、地方自治や町内会の問題は、時代の変化が非常に激しいので、なかなか難しいと思う。この総括を見ると、まずリーダーの熱意が大事だということが読み取れる。それからPDCAサイクルの中で新しい課題もあると(いうことがわかる)。そういう意味では、総括文として、字数的にも非常に分かりやすいと思う。

反省があって、これを受けて次年度にはどうするか。大体の団体、会社も社長のリーダーシップや中間管理職の役割があって、そして改善をしている。それから言うと、これを受けて、各論になった時にできるだけ分かりやすく箇条書きにし、目標数値を設定する、そういう流れになるだろうと思って読んだ。そういう意味で、非常にいい総括だと感じた。

委員： まずは、この(資料3の38ページ)「5 総括」というのは、「“学びと活動の環”からつながる地域づくり・人づくり～SDGsの達成を目指して～」というこのテーマについての(協議結果の)総括であるのご理解いただきたい。そのため、「5 総括」の内容は)今までの協議の各総括に沿って、最後も「地域づくり・人づくりに取り組んでいただきたい。」となっている。

もう1点は、このまとめの冊子は、4回にわたって行った事例発表とグループワークのまとめでもあるということである。そのため、私たちが経験したグループワークから出た意見を基にした総括である。社会教育、生涯学習の課題は数多くあるが、この4回のグループワークから出てこなかったような話を盛り込むわけにはいかないと思っている。

委員： 今の委員意見のとおり、この「5 総括」は、いろいろな分野で、いろいろな角度で見られるが、やはり私たちが学んできた、一緒にあのグループワークを通して得た1つの総括だと思う。

そして、課題がしっかり書いてあるというところに、これは次のPDCAのアクションを起こすきっかけになると(思っている)。しっかり課題をかみ砕いて、きちんとここに掲示してあるというのは、読み応えがあると思った。

これを基に、私たち地域の住民としても、何をしていけばいいのかというのを、市民センターを核にして考えていくのだなということをお教わった。

委員： 今回の協議テーマを作るところから関わっているで、補足的なこととして少しお

伝えたい。

まず、この協議テーマを作成した時にいろいろ議論があったが、SDGs をここに入れた意味について。

課題が多く存在しているだけでなく、コロナ禍という状況であることも踏まえると、この2年間(の任期)で全てを結論づけることはまず難しいだろうと考えた。そこで、コロナ禍の状況と、時代の流れも含めた上で、特に課題となり得る大きなテーマ(を設定した)。そして、地域防災やデジタル、健康に関する事業を実施している市民センターでキーステーションにしたらより具体的な意見も出るだろうと、(事例発表やグループワークの協議手法を)決めた。

つまり、この(任期)2年間の大きな時代の流れとコロナ禍の状況の中での、北九州の課題(への対応)の大まかな方向性を、今後につなげる形で示せたらいいのではないかと考え、この協議が始まったという経過がある。

また、今回のこの小テーマ(子どもの健全育成・体験活動、地域防災力の向上、地域の健康増進、デジタル化への対応)は、それぞれ、まさしく今進行している課題であり、今の北九州市の取組みの中に、コロナ禍(への対応)が具体的に含まれている。この協議でまとめたことを今後の行政で活かしていけば、より一層の具体性につながっていくのではないかと思う。

事務局： この「委員意見取りまとめ案」については、本会議での委員意見を踏まえ、議長と事務局で最終調整させていただく。